

医療福祉コミュニケーションにおける表情の重要性について (2) - 特定の文脈における表情認知と社会的スキルの関係 -

新潟医療福祉大学 医療情報管理学科・高橋直樹

【背景】

本研究では、筆者が実施した表情認知における文脈の重要性に関する検討¹⁾に基づき、その次の段階として、具体的な従属変数として「社会的スキル」をとりあげ、文脈における表情認知と社会的スキルとの関係を調べる。特定の感情が表出された表情認知において、社会的な状況や対象者の性格などの様々な文脈が大きな影響を与えることは、先行研究¹⁾などでも明らかになったが、何故、人によって表情認知の相違点が生じるのかといった問題に関しては、今後の課題として未だ残っている。そこで、本研究では、表情を認知する人間の社会的スキルを測定し、その度合いによって、同じ文脈の表情でも異なる認知構造をもつのではないかという仮説を立てて検証することとした。社会的スキルとは何かという問題に関しては様々な考察がなされているが、ここではそれを「対人関係を円滑にするスキル」と定義し、そのスキルを測定する尺度として、KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills: 18items)²⁾を用いる。

【方法】

新潟県内の4年制大学の1年生217人に、チャールズ・チャップリン製作・監督・脚本・編集・主演の映画「街の灯」(日本公開1934年)の全編(87分)を鑑賞させ、この映画が「Happyエンドだと思う」か「Happyエンドではないと思う(アンHappyエンド)」か「その他」の三者択一で回答するよう求めた。「その他」を回答した場合には自由記述を求めた。さらに、各選択肢を回答した理由と、ラストシーンにおける主演男優(チャップリン)と主演女優(ヴァージニア・チェリル)の表情にはどのような感情が表現されているか、自由記述で回答を求めた。

さらに、本研究では、これらの表情認知に加えて、同じ対象者に、KiSS-18²⁾という社会的スキルを測定する質問紙への回答を求めた。これは18項目から構成され、各項目は5段階のリッカート尺度であり、18点~90点の範囲の得点によって、各個人の社会的スキルを測定する質問紙調査である。

【結果・考察】

まず、映画「街の灯」を用いた表情認知の再実験の結果であるが、「Happyエンドだと思う」と回答した評定者が77%(168人)、「Happyエンドではないと思う(アンHappyエンド)」と回答した評定者が19%(40人)、「その他」と回答した評定者が4%(9人)であった(図1)。

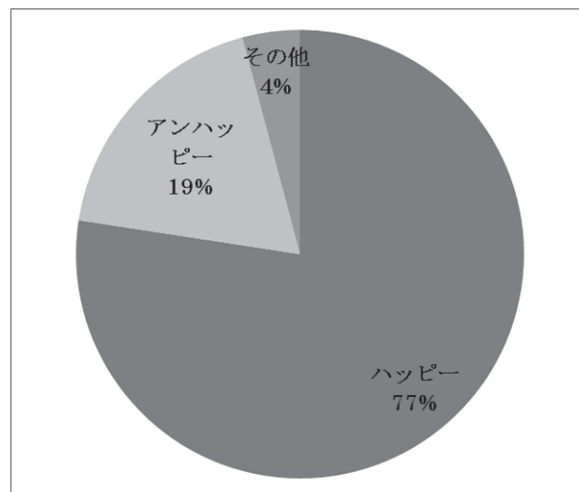


図1. 映画「街の灯」を用いた表情認知の再実験結果

2010年の実験¹⁾では、それぞれ、79%、13%、8%であり、「Happyエンド」と回答した人の割合はほぼ同じだったが、「アンHappyエンド」と回答した人の割合は6%の差異が生じた。次に、「Happyエンド」と回答した評定者と「アンHappyエンド」と回答した評定者との間にKiSS-18得点の差がみられるかどうかを調べた結果、両者の間に有意差はみられず($t = 0.157$, n. s.)、「街の灯」のラストシーンにおける表情認知と社会的スキルの関連性は認められなかった。

【結論】

本研究では、過去の研究結果¹⁾などから、特定の文脈に基づく表情認知において個人差が存在するという前提に基づき、その個人差の一つとして、KiSS-18という社会的スキル尺度を用いた研究をおこなったが、映画「街の灯」という文脈における表情認知には、社会的スキルの影響を受けないことが分かった。あくまでも、一つの映画における限られた表情のみを取り上げただけでは明確なことは言えないが、一人の歴史に残る名優の非常に難解な表情の認知において、KiSS-18を用いて測定された社会的スキルが関与しなかった結果は非常に興味深い。その理由として、今回の実験において提示された表情がHappyかアンHappyかは正解がない問いであったことなどが考えられるが、そもそも人間の表情認知には正解や不正解といったものがないということを再確認するとともに、高い社会的スキル(対人関係を円滑にするスキル)をもつ人間は、どのような表情認知構造を持つのかを明らかにするために、今後より詳細な実験をおこなう必要がある。

【文献】

- 1) 高橋直樹(2010)医療福祉コミュニケーションにおける表情の重要性について(1)-表情認知における文脈の重要性に関する検討-,新潟医療福祉学会誌,10,1,第10回新潟医療福祉学会学術集会特集号,p.56
- 2) 菊池章夫(1988)思いやりを科学する,川島書店